

## 第3回環境被害に関する国際フォーラム

### セッション1 被害の現状報告

## 淮河汚染対策と癌の村の変遷

フォ ダイシャン\*

淮河水系生態環境科学研究センター

### 美しい淮河が「壊れた川」に—生態災難

私はフォ ダイシャンと言います。中国の淮河流域からやって来ました。淮河は中国三大河川の一つで、黄河と長江の中間にあります（図1）。淮河はとても美しい川です。村もとても美しいのです。淮河には「淮河が熱せば天下は足りる」という言い伝えがあります。とても食料が豊富だという意味です。

しかし、このようなきれいな川が、非常に深刻な汚染の被害を受けました。これが私たちの生活を変えてしまいました。私たちを生存のギリギリにまで追い込むような試練となりました。癌が多発しました。とてもたくさんの方が亡くなりました。私たちはこれらを「生態災難」と言っています。「生態災難」は戦争・伝染病・自然災害を超えています。こうして淮河は、「壊れた川」「死んだ川」になってしまいました。



図1 淮河流域（塗りつぶし部分）

藤本延啓が作成

### なぜ汚染が発生したか

このような淮河に希望はあるのでしょうか。私たちは「淮河衛士と淮河を救う希望プロジェクト」を始めました。一言でいうと「政府に対して真実を話す」「人々のために道理を

\*幼少より学ぶ。後に6年間従軍。その後街道弁事所で秘書を務め、政府統計の助手と宣伝教育の業務を兼任する。1996年、雑誌『北京皮革』の副編集長を務める。1997年、『周口日報』の撮影記者となる。1998年に辞職し、淮河流域の生態環境保護の撮影と実地調査を行う。2001年、環境保護NGO「淮河衛士」を立ち上げ、会長に就任し現在に至る。その間、NGOを率いて淮河水汚染に対する公民監視制御活動を実施し、癌多発の抑制に有益な探索を行ってきた。

話す」「公衆環境権益の維持と保護」という原則を持った活動です。

この問題を引き起こした企業は、味の素の子会社だった「蓮花味精（レンカアジセイ）」という企業です。この企業は国から幾重にも保護を受けていて、アジアでトップクラスの企業でした。そして、社長は実業家でもあり、政府の官僚でもありました。国はこの企業に600億円の投資をしましたが、まさに文字通り水の泡になってしまいました。

どうしてこういうことになったかという、政府はだまされていたわけです。例えば、夜に汚染を垂れ流したり、雨が降った時に流したり、あるいは担当者が来た時に排水を止めて、その後に流したり、隠し排水パイプを使ったりしました。国の8つの部局も全てだまされていたのです。そして、現地の環境保護局長は誰だったのでしょうか。実はその企業の社長の娘婿だったのです。腐敗をしていたわけですね。家族ぐるみでやっていたわけです。

## 私たちの活動—対立から対話へ

そこで私たちは「10年の汚染対策は夢に終わった」そして「汚染によって癌の村が作られた」と暴露して、3つの活動をしてきました。

1つは淮河の汚染と企業の排水に対する、長期にわたる追跡調査と監視です。最初は私ひとりでした。政府の仕事を辞めて、フォトジャーナリストとしての活動を始めました。それから家族が手伝ってくれて環境保護組織「淮河衛士」をつくることになりました。

次に私たちは、「情報を得る権利」「意見を表明する権利」「参加をする権利」「監視をする権利」を掲げて、住民の参加を促しながら、活動しました。今まで出来なかったことを、ひとつひとつ解決していきました。汚染を発見したら、その現場で企業や政府の関係者をまじえて解決を図ってきました。汚染企業の門の前に看板を掲げ、汚染物質の排出量や基準を守っているか否かについて、人々に知らせました。

そして、私たちはそのような状況を政府の上層部に伝えました。政府は私たちの活動を見て「人を根本とする科学発展」をさせなければいけないとして、そのような政策を進めることになりました。私たちの住民参加による行動が、政府の発展戦略の変革を促したのです。

こうして「汚染が癌の村をつくりだした」と私たちが伝えていったことによって、原因企業自身も自分達の活動を見直し、改善するようになりました。こうして企業と対立し、対抗し、対応を積み重ねていくことによって、私たちの力が強くなってきたわけです。そうした中で、企業も汚染に対応しようという態度に改め、対立の関係から対話の関係に転換することができたわけです。

## 「蓮花モデル」

私たちは、先ほどの企業の名前をとって「蓮花モデル」というものを打ち立てました。その内容は「共同でいろんなことをやっぺいこう」「環境保護の重視を誠心誠意、信念のもと

にやっっていこう」、「情報公開」「住民監視」、そして「省エネと排出削減」「排出基準の達成」「高度処理」「循環経済」、さらに先ほど言った「科学発展」「社会的な責任を全うしていこう」ということです。

そしてこの「蓮花モデル」によって、非常にいい成果を上げることができています。例えば、調味料の生産過程で出てくる廃棄物を、ただ回収するのではなくて、有機肥料に変えて、それを売る事によって大きな利益が上がるようになりました。その企業の汚染排出量も、一日当たり12万トンから1.2万トンと10分の1に減らすことができ、排水中のCODやアンモニア窒素の濃度も大きく削減することができました。また、たくさんの深井戸を掘って水を賄っていたんですけども、それを87から7つまで減らすことができました。

この「蓮花モデル」は、企業のパフォーマンスを変えただけでなく、この企業が達成した排水の濃度を手本として、環境保護部は中国全体の調味料の産業における排出基準を制定しました。そして、こうした「蓮花モデル」を私たち独自で、桐柏・重慶・湖北といった、いろんな地域で新しく展開することにしました。

## 監視活動の成果

私たちのNGO「淮河衛士」が組織をした住民監視によるネットワークは、いま全部で8つあります。だいたい800キロメートルの範囲に8つのステーションがあって、そこで人々が河川の汚染を監視しているわけです。私たちは船に乗ったり、ある時には空からも、水環境の監視を行っています。こうした監視によって、これから投資をしても適切な排水処理ができない、そういった工場を閉鎖に追い込むことができました。これまでたくさん、排出口から汚染水が排出される現場を見てきたわけですけども、私たちの活動によって、そういった排出口はなかなか見られなくなりました。だんだん淮河の水質も改善し、生態系の修復も進んできました。

中央政府の環境保護部や淮河水利委員会とは、「環境保護の直通列車」とも言えるような、よい関係を構築できました。環境保護部は「淮河衛士」を「淮河の環境保護のための目」と言うようになり、河川の汚染を見つけたら、すぐに政府に訴えることが出来るようになりました。私たちが撮った写真を1枚1枚環境部局に届けます。こうした中で、淮河の水汚染対策を巡って省の政府と企業が一緒になって協議をする、そうした場面も生まれるようになりました。

こうしたハイレベル協議ができるようになった後に、淮河の水質は好転しました。非常にきれいになってきました。例えば貴重な「桃花クラゲ」が発見されたということは、とても水がよくなったことの証拠です。ただ単に見た目できれいになったというわけではないということが分かると思います。

今、そのハイレベル協議は、単なる協議に止まらずに、行政から企業に対して約束を守らせるというプレッシャーを掛けたり、あるいは監視や検査を強化したり、それから先ほど述

べた私たちがつくった住民参加のネットワークのような、河川の水質の監視制度を行政幹部によって整備をする、そうした制度の発展にもつなげることができました。例えば、水質汚濁を引き起こしていた別の産業として皮革工場があったんですけれども、当初の265から10まで減りました。非常にいい成果が出たと思います。

## 医療・衛生の援助活動

私たちの地域で「癌の村」が発生したように、「どんな環境汚染も結局は人体の健康に危害を及ぼす」ということが言えると思います。私たちは2つの援助活動を行いました。1つは医療・衛生の援助活動、もう1つが飲用水改善の援助活動です。

まず医療・衛生の援助活動について説明をしたいと思います。私はかなり前から、日本で起きた水俣病について、写真を通して知っていました。私たちは水俣病の教訓を学ぼうとしました。政府の衛生部疾病予防コントロールセンターは、淮河流域で疫学調査を行って、水汚染と癌には相関関係があるという結論を出しました。中国の政府が初めて淮河流域の「癌の村」が水汚染によるということを認めたと言えると思います。

癌だけではなくて、先天性の心臓病を患った子供たちが多く見られるのもこの地域の特徴ですけれども、そうした患者に対する援助活動も行いました。そういった私たちの援助によって、手術を行い、それによって治療が実現する、そういった子供達もたくさん出てきました。私たちはこれまで、200名あまりの癌患者に対して援助を行い、51名の先天性心臓病の子供達の手術を実現させることが出来ました。

## 飲用水の援助活動

それから、水汚染被害が深刻な地域で、清浄な飲用水の援助活動を行いました。非常に汚れた河川がある村には、必ずと言っていいほど「癌の村」がありました。私たちは飲用水の改善を通して、癌の多発という状況を変えようとしてきました。水を飲みたくても飲めない、そういった地域がたくさんありました。私たちは日本からもたらされた技術によって、「生物浄水装置」を実験し、淮河沿岸の47の村で50基の装置の建設に成功しました。私たちのこの装置の特徴は、薬品を使うのではなくて、自然の作用によって水の浄化をするということが重要なところですよ。私たちはこの飲用水の援助、生物浄水装置を使ったことによって癌の発生率がだんだん下がっていく、そういった調査結果を得ることになりました。飲料水の水質だけではなくて、農村の生態系の修復も軌道に乗り始めて、「枯れ木に春が訪れた」そういうことを言ってくれる人もいます。

村の人々は、この水を非常に歓迎して、喜んで飲んでくれます。非常にたくさんの専門家が視察に訪れています。大学生の団体もたくさん視察に来ています。私たちの同級生や出身者も、こうした生物浄水装置の建設に支援をしてくれました。生物浄水装置によって、子供

達は放課後すぐに水を飲むことができるようになっていました。もう汚れた水を子供達は飲まなくてよくなったんです。美味しい水を飲むことによって若返ったように見える女性もいました。健康が改善したということですね。私は「娘さんですか?」と聞いてしまいました。

こうして47の村で50基の水浄化装置を作って、2,000名余りの癌患者を死から救うことができたといえるのではないかと、私たちは考えています。水が良くなることによって、住民の収入が増え、家を建てて結婚することができる。そういうふうな好循環も生まれてきました。

## 海外からの支援と水俣の教訓

私がここまで紹介したような活動は、実は水俣の関係者を含めて、たくさんの日本の方から支援、支持をいただけてきました。この場を借りて感謝を申し上げたいと思います。原田正純先生も、私たちの現地を訪れて、汚染の状況や汚染対策の状況も視察をしてくださいました。

日本の方々との交流の中で着想したやり方もありまして、例えば「蓮花モデル」は、水俣病関西訴訟の話聞いたことによって、私たちは訴訟をしなくとも問題解決できるのではないか、ということで「蓮花モデル」として対話の機会を設けたという経緯もあります。

最近、相川泰先生に来て頂きまして、日本の水俣病の教訓と経験についてご教授頂きました。金先生にもご尽力いただきまして、現地の村民達のトレーニングも行っていただきました。それから大塚さんもこうして一緒に来て頂いて支援していただきました。

私たちは2回にわたって日本の「草の根無償事業」を得て、施設を建設することが出来ました。以前はコンクリートを使った装置だったのですが、ステンレスを使った装置を作って、モジュール化するような試みも行っています。その他、世界銀行であるとか、台湾のカンシーフであるとか、フォード自動車等々たくさんの賞をもらうことも出来ました。

水俣の教訓に学び、未来に向かって生態系を修復し故郷を再生する。これが、私たちが進めてきたことです。日本で生まれた技術が中国にもたらされて、それが中国のたくさんの村の人達の飲用水の改善に繋がったと言えると思います。

## 「四身一体モデル」から「癌の無い村」へ

私たちは「四身一体モデル」と言っていますが、「生物浄水」、それから「村民自治」「住民参加」「コミュニティ発展」、これらを進めることによって村の環境保護を進めていこうと、そうした新たな計画を掲げています。これを更にすすめることによって、「癌ゼロの村」「癌の無い村」を作れないかということを、模索したいと考えています。これは先ほど宮本先生がおっしゃった「内発的発展」的なメカニズムによって、生態系の修復をし、その地域を再生するやり方と繋がるのではないかというふうに考えています。

「癌の村」調査を行った中国の社会学者は今、「癌の無い村」の調査を行っています。こうして大学の研究者が調査をしてくれることによって、お互い違う地域ですけども、共同研究が出来るのではないかと考えています。500の「癌ゼロの村」「癌の無い村」を作ることは可能だと考えています。

淮河の水質の現状を見ていただきたいと思います。今は淮河で泳ぐこともできます。私の孫が泳げるようになったら皆泳げるんじゃないかということで、まず孫が泳ぎ始めました。私も泳ぎました。今では、1万人もの人が泳いでると孫は言っています。私たちの目標というのは川を健康にし、村を健康にするということです。以上です、ありがとうございました。

#### 参考文献

- ・ 霍岱珊 「淮河「生態災難」の村々に焦点をあわせて」『アジア研ワールド・トレンド』122巻、pp.40-43、2005年。
- ・ 福島香織 『中国複合汚染の正体－現場を歩いて見えてきたこと－』扶桑社、2013年。
- ・ 大塚健司 「生態災難からの脱却に向けて：中国淮河流域「癌の村」からの報告」『アジア研ワールド・トレンド』214巻、pp.4-7、2013年。
- ・ 大塚健司 『中国水環境問題の協働解決論－ガバナンスのダイナミズムへの視座－』晃洋書房、2019年。